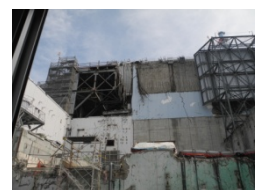


## 神話崩壊、廃炉の時代



写真は昨年6月25日に視察した福島第1原発の事故現場。今も多くの人が、危険な事故現場で廃炉作業に従事している。標題の中日新聞1月6日社説「平成と原発」後半部分を紹介したい。

福島第1原発事故が崩壊させたのは、「安全神話」だけではありません。事故処理にかかる費用は最低21兆円。恐らくさらに増えるでしょう。結局は国民負担。これ一つとってもすでに、「経済神話」は粉々です。約20年探し続けても、高レベル放射性廃棄物の受け入れ先は見つからない。たとえ見つかったとしても、10万年に及ぶといわれる厳重管理に、どれだけ費用がかかるやら。

安全対策にかかるコストは膨らみ、新增設どころではありません。現在、23基が廃炉を決定、または検討中。平成は「大廃炉時代」の幕開けにもなりました。廃炉にもまた、長い歳月と膨大な費用が必要です。

15年、温暖化防止の新ルール、パリ協定の採択を受けて、化石燃料から再生可能エネルギーへ、宇宙船地球号のエンジンの付け替えが始まったのも平成です。

ドイツの「脱原発」だけではありません。世界第二の原発大国フランスも、原発依存度を減らすため、30年までに陸上風力発電を3倍、太陽光発電を5倍に拡大、洋上風力の増設も具体化が進んでいます。高速炉計画は凍結です。英国の原発新設計画も、コスト高のため暗礁に乗り上げました。

福島の惨禍を見れば、原発は二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を出さないクリーンなエネルギーという「クリーン神話」もとうの昔に絵空事。温暖化対策を持ち出して小型原発の開発に向かうという日本は、国際的にはかなり異質な国なのです。

世界で唯一、それも、第五福竜丸事件を含め三度の原水爆禍を背負う国、世界最悪級の原発事故と今現に向き合う国、その国の政府が、なぜここまで原発にこだわりを持つのでしょうか。「去年の夏の異常な暑さも乗り切りました。省エネも進み、九州では太陽光の電力が余っています。原発へのこだわりは、電力のためだけではないのかもしれませんが。もしや軍事利用の可能性とか…」東北大教授(環境科学)の明日香寿川さんは首をかしげます。

いずれにしても、「わかっちゃいるけどやめられない」では、それこそ「無責任」。可能な限り次の時代に負担を残さぬよう、私たちは今年もこの「なぜ」を、突き詰めていかねばなりません。

(2019年1月16日)